



Data

監督:エイドリアン・グランバーグ
出演:シルベスター・スタローン/
パス・ベガ/セルヒオ・ペリ
ス=メンチェータ/アドリ
アナ・バラサ/イヴェッ
ト・モンリアル/ホアキン・
コシオ/オスカル・ハエナダ
/ルイス・マンディロア

■■■ショートコメント■■■

◆シルベスター・スタローンが『ロッキー』(76年)シリーズに続いて大成功させたのが『ランボー』シリーズだが、筋肉隆々たる彼も、今や御年73歳。その歳では、もはやド派手な肉体アクションは無理。そう思っていたが、2014年に還暦を迎えたジャッキー・チェンが、『ナイト・オブ・シャドー 魔法拳』(19年)等で相変わらず頑張っている姿を見ると、俺だって・・・。

彼がそう思ったかどうかは知らないが、『ランボー/最後の戦場』(08年)がタイトル通り最後のはずだったにもかかわらず、今般、もう一度『ランボー ラスト・ブラッド』を公開することに。

◆本作の筋書きは、いたって簡単。ベトナム戦争の帰還兵として重度のPTSD(心的外傷後ストレス障害)に苦しみながらも、ランボー(シルベスター・スタローン)は今、アリゾナ州の牧場で心を癒し、穏やかな日々を過ごしていた。彼の最大の心のよりどころは、一緒に暮らしている古い友人のマリア(アドリアナ・バラッサ)と、その孫娘ガブリエラ(イヴェット・モンリアル)だ。

シルベスター・スタローン程の筋肉美はないものの、リーアム・ニーソン主演の『96時間』シリーズ(『シネマ23』未掲載)では、「家族を守り抜く」が常にテーマにされているが、『ランボー』シリーズ最終作たる本作のテーマもそれだ。もっとも、本作のランボーとガブリエラの関係は、本当の父娘ではない。しかし、ランボーの家族に対する思いが人一倍強いことはストーリーの展開につれて、おいおいと・・・。

◆女の子が一人だけでメキシコに行くのは危険!本作を観ているとそれがよくわかる。しかして、ガブリエラがランボーやマリアの説得に従って、いったんは実の父親に会うとはいえ、メキシコ行きをやめると宣言し、メキシコとは逆方向に車を走らせていたのに、急に気持ちを切り替えたのは一体なぜ?それは、ランボーやマリアから「あの男は出来損

ないだ!」「人間のクズだ!」とボロクソに言われながらも、なお父親がなぜ自分を捨てたのかを知りたかったためらしい。

そんなガブリエラに密かに父親の居所を連絡したのは、今はメキシコに住む「ある女」だが、この連絡は親切心から?それとも・・・?

◆人身売買の組織はヤバい国にはどこにでもあるが、メキシコのそれはかなり徹底している。そのため、やっと再会できた実の父親からボロクソに言われ、心が折れてしまったガブリエラは、「気分転換が必要だ」と勧められるままに、連絡してきた女に連れられて行ったクラブでたちまち人身売買の餌食に。それを知ったランボーは、ガブリエラを救出すべくメキシコに向かったが・・・。

『ロッキー』シリーズ第1作の脚本をシルベスター・スタローンが自ら書いたのは有名な話だが、本作も73歳になった彼が自ら脚本を書いている。その脚本では、導入部にランボー手作りの地下洞窟をチラチラと見せてくれる。これはあくまでベトナム帰還兵としてのランボーの趣味だが、その規模はすごい。しかし、そんな導入部の演出と人身売買組織からガブリエラを救い出す本筋のストーリーがどう絡まっていくの?そんな興味を持ちながら、本作中盤はランボーがあっさり痛めつけられてしまう展開を見ていこう。

◆ガブリエラを奪われたばかりか、再度密かにメキシコに乗り込んできたランボーによって弟を無残に殺された人身売買のボスが、ランボーへの復讐を誓ったのは当然。そこでボスは大勢の部下を引き連れて、一人で牧場に住んでいるランボーの襲撃に向かったが、それを予想したランボーの準備は万端だ。なるほど、本作の脚本はそこにメインが設定されている。したがって、本作ではなぜ真昼間に襲わず、夜中に襲撃しないの?と野暮な質問をしてはダメ。牧場内はもちろん、ランボー自慢の地下洞窟に仕掛けられた様々な迎撃システムが本作の売りなのだ。ちなみに、本作を観ていると、日本でのイーゴス・アショアの計画がポシャってしまったのはナンセンス。つくづくそう考えてしまう。

それはともかく、ランボーが仕掛けたすべての罠に次々と引っかかっていく襲撃舞台では、一人また一人と悲惨な死を。そして、ラストではボスも無残な最期を。

2020(令和2)年7月13日記